



歴史散策：中村区稲葉地

2026.6.13

名古屋市中村区の西端、庄内川の堤防を背に広がる「稲葉地」の地。ここは、織田信長が青年期へと脱皮していく、若き日の熱気と葛藤が色濃く残る所縁の地でもあります。

信長の足跡を辿る ★ 神明社～真聖寺～了通寺～稲葉地城跡～凌雲寺～菫津合戦場

31期 y.okuno

真聖寺

黄檗宗 山号は医王山 本尊は薬師如来 ・開山は黙然雷和尚



・岩塚村祠管の支配にあったが、享保10年（1725年）に宇治万福寺の末寺となり、真聖寺となった。
薬師如来伝説：昔、庄内川が氾濫した際、流れてきた薬師仏を村人が網ですくい上げて安置したところ、村で流行していた疫病がピタリと収まったと伝えられています。

稲葉地城址（いなばじじょうし）

神明社に潜む、一族の興亡の跡

凌雲寺のすぐ北側にある「城屋敷神明社」。その鳥居の傍らに「稲葉地城址」と刻まれた石碑が立っています。

稲葉地城（いなばじじょう）：織田信長の叔父・織田信光（津田豊後守）によって築かれた平城。東西約73メートル、南北約102メートルの規模があったとされる。現在は遺構こそ残っていませんが、周辺の「城屋敷町」という地名そのものが、かつてここに城郭があった証拠です。信光の死後は、彼の息子たちが城を継ぎましたが、桶狭間の戦いや長島一向一揆といった激戦の中で次々と討ち死にしていきました。そして1582年の「本能寺の変」で最後の城主が二条御所で討死したことで、信長とともに激動の時代を駆け抜けたこの城は、歴史の表舞台から姿を消しました。



凌雲寺（りょううんじ）

信長が駆け抜けた「手習い」の記憶



境内に入ると、本堂の前に「信長草紙掛けの松」（現在は3代目）と碑があります。ここは信長が幼少期に手習い（学問や習字）に通ったと伝わる寺院です。若き日の信長が、墨で真っ黒になった草紙を松の枝に引っ掛け、そのまま庄内川の河原へと飛び出して泥まみれになって遊んでいた……そんな「大うつけ」と呼ばれた信長の、エピソードが伝わります。

・落ち着いた臨済宗らしい禅寺の風格を備え、宮大工による建造物、見事な庭園も一見の価値があります。

菫津合戦場跡（眺望）

若き信長、一世一代の「渡河作戦」の地からスタート

散策の終わりは、庄内川の堤防近く、かつて「菫津（ふきつ／稲葉地の川端）」と呼ばれたこの場所から。ここは信長が尾張統一への大きな一歩を踏み出した「菫津（かやづ）の戦い（1552年）」の重要な舞台です。当時、清須守護代の坂井大膳らが織田家に反旗を翻しました。那古野城を出陣した弱冠19歳の信長は、この稲葉地の川端（菫津）まで一気に軍勢を進め、目の前の庄内川を果敢に渡河して対岸の敵を撃破したのです。この勝利によって「大うつけ」という周囲の低評価を払拭し、やがて清須侵攻から尾張統一への足掛かりを築いたのです。

菫津の戦い関係地図

